

ドーハ日本人学校における和太鼓活動を通じた音楽づくり

前ドーハ日本人学校 教諭

神奈川県相模原市立上鶴間小学校 教諭 渡辺 由紀

キーワード：在外教育施設、ドーハ、音楽、和太鼓活動、音楽づくり

1. はじめに

ドーハ日本人学校は、カタールの中心部であるドーハから車で約30分の場所にあり、小学部1年生～中学部3年生までの児童生徒が同じ校舎で学習している。音楽の授業は、小学部1・2年生が週2時間、小学部3年生以上の学年が週1時間となっており、1・2年、3・4年、5・6年、中学部、という複数学年合同での授業を行った。また、週2時間のドーハタイム（総合的な学習の時間）では、主に伝統となっている和太鼓の練習に取り組んだ。異学年合同での音楽の授業や、全校児童生徒の和太鼓活動など、日本ではない貴重な経験をさせていただいた。ここに、その活動を紹介したい。

2. 現地校の音楽活動の実態と交流

(1) カタールの音楽事情

カタールは、アラビア半島からペルシャ湾に突き出している半島形の国である。秋田県とほぼ同じ面積で、周囲のほとんどを海に囲まれている。そのためカタールの音楽は、海の詩・歌・舞踊に基づいている。宗教や職業的な背景から、男性と女性とで歌われている歌が異なる。男性は、以前栄えていた真珠狩りでのダイビングのとき、船を漕ぐときの活動を語る歌を、女性は、真珠船が戻ったとき、調理など日常活動に関連する作業をするときの歌を、手拍手でリズムをとりながら歌っていた。今も民族音楽として残っており、太鼓などの打楽器とともにイベントなどで披露されている。

カタールには、小学校・中学校の他に高等学校、専門学校、大学がある。義務教育は高等学校までで、就学率は95%となっている。カタール人の通う学校は、男子・女子が別々で、女子校は先生も女性のみとなっている。

海外では基本的に音楽の授業を実施していないことが多く、カタールの小・中学校でも、音楽の授業は行われていない。インターナショナルスクールの中には、音楽の授業を行っている学校もあるが、音楽の教科書はないと聞いている。授業内容は、みんなで歌を歌ったり、リコーダーを演奏したりするのではなく、ミュージカルを創るといった活動が中心となっているようである。

このように、現地校では音楽の授業はほとんどないが、日本と同じようにピアノや楽器の演奏などを個人的に習っている子はいる。また、学校によっては放課後活動を定期的に行っていて、そこでギター演奏やバンド活動をしている子もいる。

(2) 日本人学校との交流を通じた和太鼓活動

現地校やインターナショナルスクールの子どもたちがドーハ日本人学校に来る時には、和太鼓の演奏を披露し、体験活動を取り入れた。訪問した子どもたちはまず、和太鼓の迫力ある音に驚き、演奏や動きに引き込まれていた。体験では、まずは太鼓に触れることから始めた。たたくとそれなりに大きな音が出るので、どの子も初めは少し戸惑う姿が見られたが、すぐに力強くたたくようになった。ただ、「みんなで一緒に同じリズムをたたく」ということが非常に難しかった。日本の音楽の授業では、低学年のうちから「ことば」を素材としたリズム遊びがあり、手拍子や打楽器などでリズムを真似したりつなげたりする学習を重ねている。だが、音楽の授業がないためか、タンタンタン（ウン）、タンタタタン（ウン）というシンプルなりズムでも合わせてたたけなかったり、たたけていても両手にバチを持っているのに右手だけしか使っていなかったりする状況が見られた。音楽の授業

での経験や普段からの積み重ねの大切さを感じることができた。



カタールの男子校との交流

3. 和太鼓と音楽授業の取り組み

(1) 和太鼓活動について

ドーハ日本人学校では、和太鼓の演奏が伝統となっている。学習発表会はもちろん、現地校との交流や公開授業研究会のオープニング、スポーツ選手が来校した時などに演奏を披露している。日本人会からの依頼で、ホテルに出かけて演奏したこともある。和太鼓の数もそろっており、長胴太鼓（宮太鼓）が8台、小さい宮太鼓が2台、桶胴太鼓が2台、締め太鼓が4台、その他にもドラや当たり鉦、チャップパがある。バチの種類や数も充実していて、手作りの竹バチもある。

赴任した当初は児童生徒の人数も多く、小学部低学年・中学年・高学年、中学部にそれぞれの曲があり、11月の学習発表会で披露した後、下学年に引き継ぎをしていた。練習時間は、週2時間のドーハタイムを前半と後半に分け、4つの学年団で順番に和太鼓をたたく時間をつくっていた。和太鼓がたたけない時間は、練習台や体育のマットを使うなど工夫して練習に取り組んだ。

引き継がれていた4曲は、児童生徒数が減ったため演奏することが難しくなった。また、他の団体が演奏している曲であることも分かり、ドーハ日本人学校オリジナルの曲をつくりたいと考えた。

(2) 和太鼓の新曲づくりの取り組み

① 1年目 1・2年生での実践

2年生の音楽の教科書にある「おまつりの音楽をつくろう」という題材で授業公開を行った。この題材は、拍を感じ取りながら表現したり、リズム譜を見ながら演奏したりする活動を通して、これまでに身につけてきた拍やリズムに対する感覚、表現の技能を育てることをねらいとしている。

この授業では、音楽をつくるためのリズムカードを提示し、組み合わせたり順番を決めたりして、自分だけのおまつりのリズムをつくる。さらに、つくったリズムを本校で取り組んでいる和太鼓の活動に生かすこともできる。ドーハタイムを通して普段から和太鼓への関心が高いので、自分でつくったオリジナルのリズムを和太鼓の曲の一部に入れるとなると、さらに学習意欲を喚起することができるのではないかと考えた。

まずは、個人での創作活動からスタートした。6種類のリズムカードから4小節分のリズムを選択し、その組み合わせを考えていく。一人ひとりにリズムカードを用意し、初めての学習内容にとまどう児童や、リズム打ちが苦手な児童でも、自分のお気に入りのリズムをつくれるようにした。また、「反復」という音楽のしくみを押さえることもできた。

個の活動の後は、グループ活動を取り入れた。友だちと順番を決めたり、つなぎ方を考えたりしながら、音を音楽にしていくことを楽しめるようにした。マグネットボードを用いて、リズムを変更したり言葉を書き込んだりしやすいようにした。また、友だちと関わりながら取り組むことで、自分と違う意見を聞くことが楽しいと感じられるような学び合いを経験させることができた。

それぞれがつくったリズムは、みんなで共有し、当時演奏していた和太鼓の中に組み込んで学習発表会で演奏した。「自分たちが考えたリズム」ということで、愛着をもつ様子がうかがえた。また、かけ声やポーズも話し合って工夫し、堂々と発表することができた。

② 2年目 中学部での実践

2016年4月に熊本地震が起り、児童生徒会を中心に募金活動や応援メッセージの取り組みが行われた。音楽についても何かできることはないか考えて調べたら、震災復興を願ってつくられた「陸奥（みちのく）」という和太鼓の曲があることを知り、この曲の前半部分を取り入れて新しい曲をつくることにした。後半部分

は、みんなで考えたリズムを組み合わせて創作した。中学部の生徒には、それぞれソロでたたく部分を入れ、自分のソロパートのリズムをつくる授業を行った。

中学生は、和太鼓にも慣れていて、スムーズにリズムをつくることができた。口ずさんだり、実際にたたいたりしてすぐにできたのは良かったが、曲の中に入れるとそれぞれのテンポ感が違って合わせているのが大変だった。1回のドーハタイムの時間で合わせることは難しかったが、練習を重ねるにつれて自分のリズムと曲とのバランスがとれるようになった。さらに、いろいろ試行錯誤しながら「やっぱりこのリズムにしよう」「ここは変えようかな」などアレンジを加える姿も見られた。

③ 3年目 3・4年生での実践

2年前におまつりの音楽づくりで授業をした学年で、今回はおはやしの音楽づくりに取り組むことにした。前時までに音符カードを組み合わせて、2小節のリズムをつくっている。ここでは2年生の時と違って、付点のついた音符や2分音符が入っている。さらに、つくったリズムに旋律をつけてリコーダーで演奏する内容となっている。

まずは、前時でつくったリズムの確認と5つの音を入れる活動を行った。はじめに「こきりこ」という日本のおはやしを聴くことで、日本の旋律の雰囲気を感じ取ったり、5つの音で旋律がつくられていることを確認したりすることができた。また、5つの音をつかってお手本を見せたことで、活動内容をつかみやすくなった。また、複式での授業なので、3年生の児童には3音でつくる等発達段階に応じた課題を提示することができた。

次に、つくった旋律の音のリズムと合わせてワークシートの楽譜に書き込んだ。和太鼓活動でリズム譜に慣れていることもあって、思った以上にスムーズだった。ワークシートに書き終わったら、実際にリコーダーでその楽譜を演奏し、音とリズムを確認した。音がとんでいたり、リズムが複雑になりすぎたりしている児童は、自分で演奏することでそれに気づき、演奏できる形に変更する姿が見られた。みんな何度も吹き直しをし、楽しみながら納得のいく音楽をつくることができた。

最後は、ペア学習を取り入れた。演奏する順番を決めるために、終わりの音を意識させることができた。また、ペアでの活動で友だちのつくった曲やリズムに関心をもち、アドバイスし合うなど、この場面でも何度もつなげて練習する様子が見られた。

授業の終わりには、「全員の旋律をつなげたらどうか」という発展的な発言が出た。次につながる課題が児童から出てきたことが良かった。一方、あえて音がとんでいる曲をつくるなどいろいろなことに挑戦しすぎたり、2音だけしか使っていなかったりする児童がいた。今後は、児童の力を高めるためにも、あえてそういう状況を経験させることで、さらによいものをつくろうという意欲につながるような授業をつくりたいと思った。

また、今回もつくったリズムを和太鼓演奏に取り入れた。曲の中にソロでたたく部分を組み入れ、そこでそれぞれがつくったリズムを披露することができた。反復を上手に使う児童もいたが、様々なリズムを組み合わせるなど自分で工夫して演奏する児童もみられた。



自分がつくったリズムを取り入れた演奏

4. おわりに

カタールの現地の子どもたちと交流などで触れ合うたびに、日本の教育のすばらしさを感じた。海外でも、生活をしていると自然に音楽に触れる。テレビをつければバックに曲が流れているし、時間になると抑揚のついたコーランが街に響き渡る。イベントでは生演奏に触れる機会もあるし、本格的なホールではカタールフィルハー

モニー交響楽団などの演奏会が行われている。このように、カタールの子どもたちも、何らかの形で音楽に関わりながら生活をしている。音楽に対する興味・関心は高いと思うのだが、音楽教育を受けていないと簡単なリズムでも合わせるのが難しいということを実感した。合唱・合奏という形でなくても、小学校の低学年からリトミック的な活動やリズムに合わせた言葉遊びなどを取り入れていることが、とても重要であるということに改めて感じた。

カタールでの3年間、音楽の授業を通して継続して同じ子どもたちに関わってきたので、一人ひとりの成長を感じることができた。和太鼓がそろっているという環境を活用し、音楽の学習内容を工夫したり、それを学習発表会や和太鼓活動に生かしたりすることもできた。児童生徒数が大きく変動する等、協働の学びや楽曲編成の難しさもあったが、音楽を中心とした様々な取り組みを考え、挑戦し続けることができたのは私にとって貴重な経験となった。これからも、学校の規模や集団の特性、地域環境等いろいろな出会いと困難があると思うが、音楽を通じた人づくりを第一に、個を生かす授業を心がけていきたいと考えている。

最後となりましたが、このような在外教育施設への長期研修の機会を与えていただいた文部科学省、神奈川県教育委員会、相模原市教育委員会の皆様に、心より感謝いたします。